

令和6年度を振り返って



栃木県中学校長会長
宇都宮市立陽西中学校長
鈴木 佳之

世界的な感染症の流行や自然災害の発生、さらには生成AIの発展など、将来の予測が困難なこの時代においては、これまでの日本の学校教育の良さを受け継ぎながら、「令和の日本型学校教育」の実現が求められています。

さて、私は4月に「関係機関に建設的提言のできる実践的専門家集団になり、学校経営上の諸課題の解決に向けて取り組む」と申し上げ、本会が取り組むべき諸課題の「見える化」を進めながら、組織力を生かした活動を展開してまいりました。

8月の県教委との教育懇談会や10月の県教委・県立高との懇談会では、総務部や進路対策部が意見をとりまとめ、要望を行いました。また、6月の関東地区中茨城大会、9月の県大会、10月の全日中岩手大会では、それぞれに実りのある成果を収めました。

今年度最大の課題は「9年度の県立高入試改革」に向けての対応でした。特に日程については、学校はもとより受検者にも大きな影響があるものとして、校長会・市町教委・私立高が「検査日の後ろ詰め」を求めて一枚岩となり、県教委に対して何度も協議を行いました。

今後、決定事項として公表されるスケジュールを

待つばかりですが、いずれにしても「検査日から卒業式までの新たな教育課程」と「合格発表後の卒業式」となることを前向きに捉え、中学校生活の集大成として充実した卒業期にしていくという覚悟をもって、各学校の実態に応じたカリキュラムマネジメントを推進していかなければなりません。

一方、教員を取り巻く環境は厳しさを増しており、中でも教員不足は深刻で、年度途中の欠員問題をよく耳にします。補充者が入らない学校では、授業のやり繰りで教員は疲弊し、学校の死活問題となっています。また、今年度から始まった「定年延長」により、今後ますます高齢者の増加が見込まれており、校内人事の硬直化と人材不足の解消法として、一刻も早い「高齢者のさらなる効果的活用」が求められています。今こそ、学校現場ならではのエビデンスと建設的意見をもって、当局に繋ぐのが校長会の役割ではないでしょうか。

さらに、今すぐに学校ができることとしては、自らの努力で教職の魅力を高め、生き生きとした教員の姿を子供たちに見せ、憧れを抱かせ、教員の卵を育てることなのかもしれません。

結びになりますが、各地区校長会、各専門部の皆様のご尽力に敬意を表しますとともに、栃木県中学校長会にご支援、ご協力をいただいたすべての皆様に感謝申し上げ、令和6年度が、皆様にとって実りある一年となりますことをお祈り申し上げます。今後の我が校長会の活動が、学校のウェルビーイングに繋がることを願ってやみません。これまで大変お世話になり、ありがとうございました。

事務局だより

学校を取り巻く環境が刻々と変化し、新たな課題が生じる中、この一年も学校経営に苦慮されたことと存じます。そのような中で、より良い学校づくりに向けて活動する校長会の役割は大変大きなものです。

会長を中心に、会員の皆様の結束により、部活動の地域移行、新たな入試制度、教職員の定年等新たな課題に向き合い、教育活動の充実に向けた活動を

進めることができました。また、令和10年度に予定している「第80回関東甲信越地区中学校長会研究協議会 栃木大会」の準備もスタートすることができ、会長が描いている本会の組織力が十分に発揮された一年であったと思います。

今後もより良い教育活動が展開されるよう、会員の皆様の連携、協力のもと、本会がさらに充実した活動になるよう努めてまいります。

(事務局長 松本 良雄 事務局員 松井 昌子)

❖❖❖ 県教委との教育懇談会 ❖❖❖

総務部長 大 島 聡
(宇都宮市立上河内中学校長)

令和6年8月2日(金)、ホテルニューイタヤにおいて、教育懇談会及び懇親会を実施しました。

県校長会としての提案事項等をお伝えし、県教委からは、国への要望や県の施策の充実について可能な限り努力する旨の回答がありました。

【中学校長会提案事項】主な内容とその骨子

1 教職員人材確保と教職員配置の改善

- (1) 正式採用教員の確保
- (2) 学力向上実践、児童・生徒指導、不登校生徒等の対応のための教員加配拡充
- (3) 産休・育休・傷休等への補充教職員配置に即時対応するための柔軟な採用、及び年度当初からの前倒し配置に関する拡充と周知徹底
- (4) 免許外教科指導及び臨時免許状対応解消のための、会計年度任用職員の増員・配置並びに小規模校における特定教科指導者の複数校兼務など柔軟な対応の推進
- (5) 学校組織の機能的・機動的なマネジメント体制の強化
- (6) 特別支援学級新設基準の引き下げ及び特別支援学級児童生徒定員6名以下の実現に向けた国への働きかけ並びに県独自の配置
- (7) 特別支援学級及び通級指導教室担当教員の計画的な育成と正式採用教員の配置の推進

- (8) 定年の段階的な引き上げに伴う、60歳以降の教職員の経験を生かせる多様な雇用の在り方について、人材確保の観点で踏まえた勤務内容や勤務条件、処遇等の環境整備

2 確かな学びを育む教育の充実

- (1) 個別最適な学びと協働的な学びを一体的に推進するための環境整備及び指導方法等の研修の充実

3 学校における働き方改革推進のための環境整備

- (1) 学校支援に係る多様なスタッフ配置の充実
- (2) 学校事務系の「県内統一校務運営システム」の導入による学校事務の効率化

4 教職員の勤務条件・処遇改善

- (1) 勤務実態に即した教職調整額の率10%以上の確保の確実な実現に向けた国への要望
- (2) 教職員の資質向上のための研修等に係る出張旅費の確保
- (3) 職務や勤務の状況に応じた処遇改善

5 運動部・文化部活動の在り方に関する方針に基づく取組の推進

- (1) 「栃木県学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する方針」を踏まえた部活動の地域移行を実現するため、地域クラブを統括する運営団体・実施主体等の整備並びに活動の充実
- (2) 教職員の負担軽減を図るための運動部・文化部活動指導員の増員と人材の確保

❖❖❖ 県教委・高等学校長会との懇談会 ❖❖❖

進路対策部長 上 野 善 巳
(佐野市立北中学校長)

令和6年10月7日(月)、とちぎ青少年センターにおいて県教委、県高等学校長会と県中学校長会との懇談会を開催しました。そこで、①一日体験学習 ②出願手続 ③入学者選抜方法 ④その他 について、新規の要望及びこれまででもお願いしてきましたが、多くの中学校長から再三にわたり挙がっている要望(24項目)を中心に、協議や情報交換を行いました。主な回答は、次のとおりです。

1 一日体験学習について

これまで継続して要望し、ぜひ実現していただきたいインターネットによる個人申込みを、再度要望した。県教委の回答は、「中学校高校双方の負担軽減に向けた改善を県の関係部局と連携し検討している」とのことであった。また、検討中との回答に対し追質問として、令和9年度の入試改革に合わせてか、それとも令和7年度に向けた検討か確認したところ、「関係部署とシステムの観点から、できるだけ早く公表したい」との回答

であった。

2 出願手続について

業務改善等の視点から、インターネット及び郵送による出願等について、進捗状況を確認した。県教委は「郵送による受検票交付、インターネット出願の利便性は十分理解しており、県としてもシステム構築に向け、できるだけ早い段階で公表できるよう検討を進めている。入学考査料の納付の電子収納も含め、できるだけ早い段階で公表できるよう検討を進めている」との回答であった。

3 入学者選抜方法について

特色選抜当日の日程や面接の日程を、事前に示していただきたい旨、要望した。県教委の回答は「高校には、中学校からの要望として伝える」とのことであった。

4 その他

実施細則に書かれていない要件が散見されるので、すべて細則に明記するように要望した。県教委の回答は「実施細則説明会でも、口頭での説明である。共通理解を図る資料であり、一般に公開していないものであることを御理解いただきたい」とのことであった。

地区校長会だより

小山地区中学校長会

本地区には、小山市内小学校24校、中学校10校、義務教育学校1校の計35校の校長から構成される小山市校長会があり、その中に小学校部会と中学校部会の2部会が組織され、中・義務教育学校11校の校長が中学校長会の会員となっています。

本校長会は、校長としての使命を自覚し、自らの見識を高めることにより学校経営の充実を目指すことで本市の教育振興を図ることを目的としています。年間7回の定例研修会のほか、中学校部会では2回の班別研修会を実施しています。すべての研修会の前半は小学校を含めた全体で行い、後半は小中別に行っています。中学校部会では、毎回、情報交換と協議・検討事項について話し合い、その後、年度初めに設定した研究テーマについてメンバー全員で研究を進め、1月の研修会での発表に向けて準備をしています。

そのほか、各種講演会や発表会を設けており、今

年度は6月に市の顧問弁護士である田中真氏より「学校をめぐる諸問題について」をテーマに事例をもとにご講話をいただき、7月には3名（小学校2名、中学校1名）の校長による「学校経営実践発表」、9月には筑波大学教授星野豊氏をお招きして「学校トラブルの現状と対応」についてご講話をいただきました。そして1月には3名（小学校2名、中学校1名）の校長から今年度の各グループの研究発表していただきます。これらの講話、研究発表等を通して、校長としての専門性や人間性について研鑽を積み、リーダーとしての資質・能力を高めることにつながられていると思います。

先行きが不透明で教育的課題が山積している今日ではありますが、これからも小山地区校長会は一人職である校長が、確信をもって学校経営を推し進められるよう、会員相互の互恵の関係の構築に力を入れ、一致団結して取り組んでいきたいと思っています。

[小山市立桑中学校長 布施木康友]

佐野地区中学校長会

本地区は、2005年（平成17年）2月28日に、佐野市・田沼町・葛生町が合併し、新たな佐野市として発足しました。また、校舎等の施設の老朽化や小学校における複式学級の解消化等を図るために、2015年（平成27年）1月に「佐野市立小中学校適正規模・適正配置基本計画」を策定し、佐野市全ての小・中学校の統廃合を進め、施設一体型義務教育学校の整備を推し進めています。これにより、将来的には9校の義務教育学校に編制され、9名の校長が中心となって学校経営をしていくことになります。

現に、令和2年4月には旧田沼西中学校区内の小中学校を統合し「あそ野学園義務教育学校」を、また、令和5年4月には、旧葛生中学校区及び旧常盤中学校区内の小中学校を統合した「葛生義務教育学校」が開校し、次の計画として令和10年4月、令和12年4月にも、新たな義務教育学校の開校に向けた準備が推し進められています。

そして、市校長会としては、安足教育事務所、佐野市教育委員会からの指示・指導事項、情報共有、協議等、教育行政機関と合同での定例の市小中校長会議を行い、その後、市小中校長研修会、更に、中学校長研修会の3部構成で毎月研修を深めています。

また、年1回、佐野市長様から貴重な御講話をいただいております。今年度も8月に「進化する佐野市 選ばれる佐野市」を演題に、佐野市の将来や子育て支援事業、キャリア教育の充実、防災拠点等について御講話いただきました。

さらに、管理職異動でも交流のある同じ教育事務所管内の足利市中学校長会とも、会員同士の親睦や交流を深めるために、毎年研修を行っています。

前述のとおり、義務教育学校の設置により、学校数が減少し、会員数も減少することになりますが、各校との連携をさらに深め、佐野市の子どもたちの将来のために、中学校長会としても協力し合い、全力で取り組んでいきたいと思っています。

[佐野市立城東中学校長 関口 純一]

私の学校経営

自分も相手も大切にし、

コミュニケーションができる生徒の育成

真岡市立長沼中学校 野澤 康 広

本校は芳賀地区の南西部に位置し、三世帯世帯が多い、田園風景の広がる地帯にあります。子どもたちは、地域に大切に育てられている一方、固定された人間関係で育つため、コミュニケーション能力の低下が懸念・心配されつつあります。

経団連の2022年アンケート結果によると、企業が求める人材像、特に期待する資質として、「チームワーク・協調性」を約8割の企業が挙げています。

予測困難なこれからの社会を生き抜く子どもたちに必要な力として、本校が育成を目指す力の一つとして、「コミュニケーション能力」を掲げました。

1 対人スキルの育成

近年、ICTの普及、家族構成の変化など、複数の要因により対面コミュニケーションの機会が減りつつあります。円滑な対人関係を築くためには、対人スキルの育成が必要です。

月に一度の全校朝会で、全校生徒を対象にソーシャルスキル・トレーニングを行うよう努めています。

テーマは、生徒指導上タイムリーな内容とし、子どもたちが疑似体験を通して、「自分もハッピー、相手もハッピーになるにはどうするか」を考え、改善していけるように取り組んでいます。

2 ふれあい活動を通じた実践力の育成

子どもたちは、様々な体験を通して、感じ、考え、学んでいきます。働き方改革やコロナによる行事精選の波が広がった今だからこそ、人と関わりながら体験する場を設定することは大切です。

対人スキルの活用を広げ、実践力を鍛えるため、2か月に1回の割合で生徒会主催のふれあい活動を行っています。

この活動では、異年齢集団がゲームなどで遊びながら、「自分も相手もハッピーになる」言葉かけや行いを互いにするよう心がけさせています。

よりよい地域社会を創ろうとする生徒の育成

～学校運営協議会との協働を通して～

さくら市立喜連川中学校長 加藤 誠

本校は、本校生徒の課題である、主体性・表現力の向上を図るためにも、令和3年度からスタートした学校運営協議会において、地域と連携・協働していくことで、郷土に誇りを持ち、よりよい地域作りの担い手となる人材を育成していこうと取り組んでいます。

本校の学校運営協議会の特徴は2つあります。1つは、2学年で行っているマイ・チャレンジ活動の事業所を、委員さんが地域の事業所等と交渉してくださり、それをもとに紹介された10事業所で実施していることです。2つ目は、キャリア教育の1つとして、全学年縦割りで実施している「職業人に聞く」においても、講師を学校運営協議会の委員さんが務めたり、講師をしてくださる地域の方を紹介していただき運営しているところです。

本校では、年4回の学校運営協議会を開催しています。第1回は6月に開催し、学校経営方針の確認

とマイ・チャレンジの事業所等の確認及び「職業人に聞く」の講師の確認。第2回は7月に開催し、地域にある産業を中心に講師を依頼した「職業人に聞く」を参観し、今後の運営に向けた意見交換を行っています。また本校では、マイ・チャレンジ活動の成果発表形態をマルシェ形式で11月に行っており、第3回は、発表の参観をし、成果と改善点等の協議を行っています。第4回は2月に実施し、本年度の振り返りと来年度の事業所の確認など、次年度の活動をよりよいものにするための協議を行い、3月下旬にはマイ・チャレンジの事業所を決定しています。

この学校運営協議会と協働しながら進めることで、学ぶことと将来を結びつけ、自立に向けて必要な資質・能力である自尊感情を醸成するとともに、自ら課題設定し、解決していく過程で、自らの考えを表現しようとすることを通して、主体性と表現力を向上させられるように今後も努めてまいりたいと思います。

「誰もが居がいを感じる楽しい学校」を目指して

那須塩原市立日新中学校 小 田 昌 宏

「誰もが居がいを感じる楽しい学校」は、今年度4月の第一回職員会議で先生方に示した学校経営目標です。その際、次のように付け加えました。

生徒にとって、「居がいを感じる楽しい学校」だけでは片手落ちです。「誰もが」には当然皆さんも含まれています。職員である皆さんにとっても「居がいを感じる楽しい職場」でなければ、意味がないと私は考えています。ここにいる皆さんにとって、日新中学校が、「居がいのある場所・楽しい場所」であれば、必然的に生徒にとっても日新中学校は、「居がいのある場所・楽しい場所」になるのです。

これは、この学校を生徒にとっても職員にとっても価値ある場所にするために尽力するという私の決意表明でもありました。

さらに、そのための方策として次の5つを提示し

ました。

- ① 教職員の授業力向上を目指します。
- ② 全職員で全生徒を支え、指導します。
- ③ 協働性の高い組織を目指します。
- ④ 風通しのよい職員室を目指します。
- ⑤ 働き方改革を行います。

紙面の関係で詳細は省きますが、①の授業力向上が経営目標を達成する上で最も大切な礎だと考えています。なにしろ学校生活の大半は授業です。その授業が安定すれば、教師にとっても生徒にとっても楽しい学校生活が実現すると思っているからです。

原稿を書いている今、今年度も残すところ半分を切りました。先生方は、積極的に授業改善、授業力向上に取り組んでくれています。それに伴い授業の雰囲気や生徒の表情も目に見えてよくなってきました。残り半年、少しでも日新中学校が誰にとっても価値ある学校になるように、職員と共に取り組んでいくつもりです。

新任校長の一言

新任校長として

宇都宮市立宝木中学校 黒 尾 宜 孝

校長室前で「アゲハチョウ、カブトムシの飼育」を始めた。生徒、教職員が休み時間になると大勢集まって観察をしていた。幼虫からさなぎになり、成虫になるまでの様子を、身を乗り出して観察したり、タブレットで写真を撮ったりしていた。また、幼虫が廊下を歩き出したときは、「校長先生、幼虫が脱走しました」と報告がきた。そして、アゲハが飛び立ったときは大きな歓声が上がった。

「学ぶ心に火をつけます。探求する心に火をつけます。」を合言葉に、生徒が「あれ？」とか「わあ！」と興味を持つものを提示して、今後も、驚きや関心を持つきっかけ作りをしていきたい。

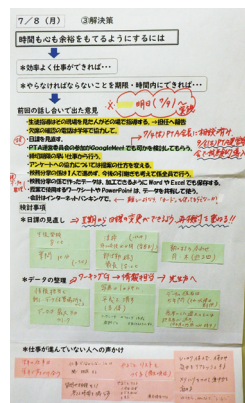
県教委から働き方改革のモデル校の指定を受け、



ボトムアップでできる事から実践している。

「カエル会議」を若手教員で組織し、どうしたら教員が本来力を注ぐべき業務に尽力できるかの観点で検討し、改善策を見える化で提案してもらっている。うまくいくかどうかは二の次で、いいなと思うことを柔軟な発想でどんどん出してもらい「スクラップ&ビルド」で挑戦していく。徐々にではあるが、教職員一人一人が環境改善、業務改善が進んでいることを実感できている。

「職場は明るく楽しく 仕事は厳しく誠実に 職場の和を大切に」を合言葉に教職員の強みを生かせるような組織を作り上げていく。目指す校長像は、「サーバントリーダー」であり教職員が自ら考え、自分の強みを生かし、自由にそして様々なことを提案し、実践してくれるような学校「チーム宝木」を作っていきたい。



地域とともにある学校

日光市立足尾小中学校長 宮 崎 哲

新任校長として足尾小中学校に赴任した日、初任者として5年間を過ごし、現在は閉校となった本山小学校を訪れました。初任者であった30年前は、足尾町立の3校の小学校と1校の中学校、県立高校がありました。本山小学校は校舎や校庭がまだ残っており、子ども達と過ごした楽しい毎日や、冬場にスケートリンクを作って毎日整備したこと、桜の木の下でお花見給食をしたことなど、たくさんの思い出が蘇り、足尾に赴任できたことの喜びとともに、自分を育ててくれた足尾に恩返しができるよう、校長としての決意を改めて抱くことができました。

足尾小中学校は、令和4年度より小中併設型一貫校となり、現在足尾にある唯一の学校です。先日は、地域と共同で開催する本校文化祭が行われました。小中学生26名が各学年での学習発表や有志での発表、全校合唱や銅太鼓の発表を、地域の各団体が琴やハンドベル、太鼓の発表等を行い、多くの方々が

来校された盛大な文化祭となりました。

足尾にはかつて銅山で栄えた歴史や文化遺産、豊かな自然と鉱毒被害からの復旧など、子ども達が地域から学ぶ資源に溢れ、日々の学習活動で活用されています。そして何よりも地域人材が豊かで学校に大変協力的であることが本校の大きな強みとなっています。日々の教育活動への支援を始め、文化祭や各種行事などを地域の方々と連携・協働しながら実施することができ、子ども達の学びや成長に地域の方々が深く関わってくださっています。

初任者として勤務した当時も、同じように地域で学び、地域の方々から支えられていたことを思い出すとともに、本校でも、足尾地区全域の皆様から地域や学校、子ども達への深い愛情と惜しみない協力をいただいていることに感謝の気持ちで一杯です。良い学校は良い地域があってこそだと改めて実感しています。今後も地域とともにある学校として、魅力ある学校経営を、地域の方々と全職員で力を合わせて進めていきたいと思っています。

新任校長として

野木町立野木中学校長 星 育 夫

本校は栃木県の最南端に位置する野木町にある今年で創立78年目を迎えた中学校である。学区は茨城県古河市と隣接し、埼玉、群馬との県境も近いため生徒の進路先は東京方面を含めた多くの都県にわたるのも本校の特徴の一つである。

県内屈指の広さの学校の敷地には、陸上競技、テニス、野球、ソフトボール、サッカー、弓道場がそれぞれ独立しており、2つの体育館と武道場、屋内プールも完備されている。また教室数なども生徒数に対して十分な余裕がありとても恵まれた教育環境にある。「文武両道」の合言葉を歴代校長が学校経営の柱として受け継ぎ、特に部活動では、教師と生徒が一丸となり県内はもとより関東、全国大会でも多くの輝かしい歴史を残し、優れた選手を輩出してきた。それを町民や地域の方々が誇りに思い、学校に対して大きな期待を寄せてきたことが伺える。

そのような学校に昨年4月に県の青少年教育施設から赴任した。小学校の校長としての経験はあるも

の、15年ぶりの中学校での勤務と歴史ある本校の伝統を引き継いで学校経営を行うことに身の引き締まる思いであった。それから今に至るまで常に念頭に入れてきたことがある。それは、長く先輩方が掲げてきたスローガン「さわやかなあいさつ 文武両道 光る汗!」を合言葉としてだけでなく、本校の教育活動が目指す人間像として生徒と教職員、家庭、地域が共有できるよう努めることである。

具体的には教職員、保護者、学校運営協議会への学校経営方針の説明の場などで、生徒には運動会や文化祭などの学校行事や講話等で必ずこのスローガンに触れてきた。それを繰り返すうち、私自身この平易な一文が本校の教育目標が凝縮されたものであること、生徒の共通価値、行動指標として定着し主体性と自己指導力を高めていることを実感することができた。

今後もこのような受け継がれてきた本校のよさを大切にしつつ、自分の経験を生かした特色ある学校経営ができるよう日々精進していきたいと思う。